



もつと声を！

《新潮小説文庫》



昭和四十三年十月十五日 印刷
昭和四十三年十月二十日 発行

定価三二〇円

著者 戸川 昌子
発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(二六〇)一一一八
振替 東京 八〇八

印刷所 株式会社 金羊社
製本所 憲専堂製本所

(乱丁、落丁本はおとりかえいたします)





もっと声を!

戸川昌子

新潮小説文庫

も
つ
と
声
を
！

不審な男

男は、その明るい門構えの家の前に来ると足をとめた。

世田谷の昔風な邸宅街にありながら、その家は、いま流行の低い塀を張りめぐらしている。

男は、門の前を行き来した。植込み越しに、よく手入れされた芝生や、舶来品の家具を置いたダイニング・ルームが見えた。

男は、数回、家の前を往復し、ためらっているような様子を見せたあとで、門柱についたインターホンのところへ行った。

「奥さまは、ご在宅でしょうか」

男は、しゃがれたような声を出した。

四十近い男で、背広がひどくくたびれている。顔の色も冴えなかった。

「どちらさまでしょうか」

たぶんお手伝いであろう、警戒した声がかえってきた。

た。

門の向う側で、大きな秋田犬が低く唸るのが、男を脅やかした。

男は焦だたしように、右手の爪でインターホンの横にある大理石の表札の文字をこすった。いかにも、神経症や精神病者がやりそうな無意識の行為だった。

「宇田川、宇田川っていうものですがね……」

男はちょっと考えたあとでつけ加えた。

「大塚の民生局にいたものですがね、奥さんにそう言うてくれればわかりますよ」

男はまた、焦々とした声を出した。

インターホンの声が途切れ、男は三、四分のあいだ門の前にぼんやり立っていた。

背広の胸ポケットから、封筒に入った古い書類のようなものを一たん取り出して、確かめてから、またもとに戻した。

門の向うの犬は、相変らず前足で土をかいては低く唸り続けている。

男は、犬に警戒され嫌われるのを、充分に承知している様子だった。

邸の中で、リモート・コントロールのスイッチを入れたのであろう、門の扉が音もなく両側に開いて、男

の進路をつくった。

犬には長い鎖がついている。

男は犬を避けながら飛び石を伝い、玄関のところまで行った。

玄関で男を待っていたのは、六十近い物腰の落ち着いた品のいい老女だった。

冷静に、愛想よく男を迎えようと努力しているようだったが、実際は驚きと緊張のために、ふっくらとした頬がかすかに引きつれていた。

「あなたは、もう絶対に来ないと約束したはずじゃありませんか」

「そのつもりでしたが、どうしても生活に困ったものですから、お嬢さんの例の書類を捜してきました。それを買っていただきたいんです」

「なんとということ……あなたのしていることは、犬、畜生と同じことではありませんか」

老女は声を震わせたが、心の中ではすでに諦めていた様子だった。男に、家にあがるようにと身振りで示した。

男は応接間に通され、ベルギー製の椅子掛けをかけた応接椅子に坐ったが、態度がなんとなくごちなか

った。

すすめられたお茶にのぼした手の爪が、黒く汚れている。

老女は、自分の膝の上の手をじっと見つめたまま、男が口を開くのを待っていた。

「こんど、わたしは福祉事務所をやめました」
「どうしてですの」

「郷里に帰るつもりなんです。もう二度と東京に出てくる気持はありません」

「郷里に帰って、ご商売でも」
「いや……」

男は曖昧に、あとをにごした。

また気不味い沈黙が訪れたが、男がとうとう本題に入った。

「やめる前に、事務所の古い書類を整理する仕事をいつかりました。そしたら、偶然、お嬢さんの古い書類を見つけました」

男は偶然と言ってから、あわてて、もじもじと体を動かした。

どうせ嘘をついても、相手にわかられてしまう——
そんな気不味さのためのようであった。

老女はまた、下を向いた。

「お嬢さんのお子さんを、養子縁組に出されたときの書類です」

男は背広のポケットから古い封筒を出して、応接机の上に置いた。

封筒の中身は、日本語のタイプと英文で打った二通の書類である。

そのほかに一通、判を押した誓約書がはさまれてあった。

堀田順也（一歳、髪——金髪、目——ブルー、特徴——左中指の関節が曲って動かない）を、アメリカ国籍を持つ米人と養子縁組させることに異存はありません。

今後、養子縁組の先方を訪ねたり、実親としての権利を行使することは、絶対いたしません。

右を誓約いたします。

昭和二十二年八月

堀田 香子
右保証人 堀田興太郎 印

「ごらんになってください」

男が、老女のほうに書類を押しやった。

老女は、書類を膝の上に置くと懐かしそうにそれを眺めていた。

「もう、あれから二十一年にもなるんですね……この子もアメリカで、もういい青年になっているでしょうね」

老女は、急に昔を思い出したのか、手を目がしらに当てた。

「そうでしょうね」

男は出された羊羹ようかんに楊子をつけながら、老女のほうを上目使いに見た。

「ところでお嬢さんは、大変いいところへおかたづきになったということですが……」

老女がハッとしたように体をかたくした。

「お嬢さんのご主人は、いまGOA局の局長さんだそうですね。たいしたご出世で……」

男は下唇をなめて、老女のほうを窺うかがうようにした。

「あなたは、どこでそんなことを調べてきなさったんです。娘のところへは絶対に行かないって、あんなに約束したじゃありませんか。もし娘のところへ行ったりしたら承知しませんよ」

「お嬢さんのところへ行ったりなんかしませんよ」

「娘のことは、どこで調べたんです」

老女の顔は怒りで蒼ざめていた。

「べつに調べたわけじゃありません。紳士録をくつていたら、お嬢さんのご主人の宗城（むねしろ）さんのことが出て来たのですから」

老女は額に手を当てた。驚くほど顔が蒼い。

「もう可愛らしいお孫さんがいらっしやるんですね、十六歳ですか」

老女はかすかに口を動かしたが、声にならなかった。

「歌とバレエのレッスンをやっていらっしやるらしいですな」

男は、ますます図に乗って言った。

「アメリカにいる順也（のりよし）さんと異兄妹にあたるわけですね。金髪の兄がいるなんて判ったら、きっと吃驚（びっくり）するでしょうね」

「もし、そんなことをしたら……あの家庭を破壊するようなことをしたら……このわたしが承知しませんよ」

老女はきつい声で言ったが、蒼ざめて今にも倒れそうだった。

「誤解なさらないでください。あたしは奥さんのためと思ったからこうしてわざわざ参ったんです。この書

類を燃やしておしまになれば、永久にお嬢さんの秘密は守れます。どうぞ、差しあげますから……」

男は机の上の古い書類を、老女のほうに押しやっ

た。

老女は震える手で書類を、帯のあいだにはさんだ。

「それでは、預からせてもらいます」

そう言ってから立ち上がると、応接間を出た。

十分ほどして戻ってくると、封筒を男の前に差し出した。

「少ないけれど、とっておいてちょうだい。わたくしの気持です」

「それではお言葉に甘えて」

男は申し訳なさそうに封筒を手にしたが、中身の金額を推しはかっている顔だった。

「五万円入れておきましたけれど、お役に立ちますか」

「じつは、郷里に帰って商売をはじめなのに、二十万円ばかり拝借したいのです。かならずお返ししますから……」

「急なことを言っても、そんな大金は手もとにありませんよ」

老女は、思案にくれた顔になった。

「そうね……それじゃ、また明日来てください。明日までに、なんとかお金を用意しておきますから……」
老女は、古い養子縁組の古ぼけた書類を帯のあいだにはさんだまま、真正面からじっと男を見つめて言った。

老女のいきおいに押されて、男はなにか言いかけたが、そのまま口をつぐんだ。

「明日は何時ごろ伺ったらいいでしょうね」

男はそのまま椅子から立ち上がって玄關のほうへ行きかけたが、また振り返った。

「三時ごろまでに用意しておきますわ」

「あの犬を、なんとかしてもらえませんかね。あたしは犬が苦手なんですよ」

「明日は小舎こやに入れておきますから、大丈夫ですよ」
老女はやっと愛想のいい微笑を、ふっくらとした頬に浮べた。

男は唸りはじめた犬を避けて、くぐり戸を抜けた。
うしろ姿がひどく陰気だった。

男が帰ってから三十分ほどして、老女は紙屑の入った塵籠ごみかごを抱えて庭に出た。

庭の隅で、紙の燃える紫白色の煙がうっすらと立ち

のぼりはじめた。

紙屑がほとんど燃えつきたとき、老女が帯のあいだの古い書類をそろそろと火の上へのげした。

紙に火が移った。

そのとき、老女は安心したのか、魅かみが前のめりになり、片手を地面についた。

お手伝いを呼ぼうとしたのであろうか、苦しそうに地面に倒れて、口を動かした。

「美香や、美香……」

美香というのは、老女の孫娘の名前だった。

十分ほどしてお手伝いが駆けつけて来たとき、老女の意識はすでに混濁していた。

「旦那さまのところで、お嬢さまのお宅へ早く電話をして……でも、なんで急にこんなことに……」

二人いるお手伝いは、老女をどう動かしてよいのかわからず、おろおろとうろたえては口々に呟つぶやいた。

結局、電話をかけたのは年上のお手伝いのほうだった。

若いほうの十八歳になる田島峯子という手伝い女が老女のそばに残り、背中をさすった。

そのとき田島峯子は、老女が燃やしていた焚火たきびのあとに何気なく目を移した。

峯子は黒い灰の上に、半分ほど燃え残っている書類に気づいた。

へ堀田順也（一歳、髪——金髪、目——ブルー、特徴——左中指の関節が曲って動かない）を、アメリカ国籍を持つ米人と養子縁組させることに異存は……」

書類の文字が、若い、このお手伝いの好奇心を激しくとらえた。

彼女は周囲を気にしながらも、結局、その書類のほうへ手をのばした。

年上のお手伝いのほうは震える手で、ダイヤルを廻していた。

「お嬢さまですか。大奥さまが急に倒れました。大旦那さまはカナダにおいていらっしゃいますし、どうしたらよいか……」

「お医者さまをお呼びしたの」

「それが、まだなんですよ。どの先生をお呼びしたらよいのかわからないんですの」

「あたくしが村岡先生にお電話するわ」

世田谷の堀田家からの電話を受けた宗城香子は、しばらく受話器をおさえていた。

なぜ、急に母が倒れたのだろうか。最近まであんな

に元気だったのにと、胸の痛みを覚えた。

堀田家のかかりつけの医者は、堀田興太郎の学生時代の親友で、A医大の教授だった。

香子はすぐA医大の医局に電話をかけた。

「村岡先生、香子でございます。母が急に倒れたって、いま、世田谷から電話がかかって参りましたの。とりあえず近くのお医者さまをお願い致しましょうか」「いや、わたしがすぐに行つてあげましょう。堀田は今、カナダでしたね」

「ええ、今、カナダの国際見本市に行つておりますの」

「それじゃ、わたしから世田谷のほうへ電話をかけて、病人の指示をしましょう。あなたも向うへ行かれますね」

「ええ、わたしもすぐに参りますわ。世田谷のほうでも、先生のお電話をお待ちしているはずですよ」

香子の電話を受けたあとで、A医大の村岡教授はすぐに車を用意させた。

親友の老妻が倒れたという知らせなので、なにをおいても駆けつけてやろうという気持だった。

その前に、病人の状態を尋ねてみなければと思い、研究室の助手を呼んだ。

「名簿を繰って、商工会議所会頭の堀田氏の電話番号を調べなさい」

「先生、いくらかけてもお話し中でかかりません」

助手が、受話器を廻しながら答えた。

「そうか、病人が悪いのだろう。あちこちに知らせの電話をかけているのかもしれないな」

村岡教授は電話を諦めて、車に乗った。

後部座席の背にもたれると、目をつむった。

親友の堀田の妻のことという、すぐに二十年前のことが脳裏に浮ぶ。

そのころ村岡教授は戦災にあつて、まだ壁の剥げ落ちたままの火の氣のない医務室で、当直をしていたのだ。

夜中だった。電話のベルで跳ね起きると、堀田の妻の安江のうわずった声が聞えてきた。

「先生、娘の香子が急に腹痛を訴えだしましたの。よくわからないんですけれど、どうも産気づいているようなんです」

「だって、香子さんはまだ結婚してないはずでしょう。それなのに……」

波紋の石

村岡教授は車の後部座席に頭をもたせかけたまま、二十年前の記憶を追っていた。

あのときは、タクシーを捜すのに手間どったのだった。

教授が堀田家へ駆けつけたとき、安江は門のところに蒼ざめた顔をして立っていた。

当時、安江はまだ四十歳代で、若い頃の美しさが、闇に浮んだふくらとした頬のあたりに漂っていた。

教授は以前から、この友人の妻に好意を寄せていたので、この年になっても安江の前に立つと、心が騒ぐのだった。

「堀田はどうしているんです」

「GHQの方との交渉があるとか申して、まだ帰って参りませんの」

「あの男も仕事熱心だから……いつも、こんなに遅いのですか」

「はい、でも今度のことかもしれない人に知れたら、きっと氣違いのようになって怒りますわ。それが心配で……」

「大丈夫ですよ。ぼくが何とか納得させますから。起ってしまったことを、とやかく言ってもはじまりませんからね。それよりもお嬢さんは、子供の父親のことをなんて言っているのですか」

「それが……妊娠しているはずがないって、まだ言い張っているんですの」

「とにかく診てみましょう」

「あのう……部屋を貸している方たちにわからないようにしませんと……今、三組も家に住んでいるんですの」

安江は家庭の主婦として、世間体を思い煩っている様子だった。戦後で、どうにか戦災をまぬがれた堀田家には、幾組かの焼け出された家族たちが住んでいた。

あのとき香子は二階に寝ていたのだと、教授は記憶をさぐった。

二階の畳の部屋で、香子は下腹をおさえながら苦しんでいたのだ。

十八歳で、その年頃の女の子らしく肉づきがよく、ピンクの寝巻の間から成熟した腿がむき出しになっていた。

「香ちゃん、いつから生理がないんだね」

教授が尋ねたが、香子は目を薄く開いただけで、頑なに首を振った。

「それではただの腹痛かもしれないから、先生に診せてごらん」

教授はあやすようにして聴診器を当てた。

「やはり妊娠です。とにかく病院に連れて行きましょう」

教授は香子を抱きかかえるようにした。どっしりとした大人の重みがあった。

階段をそろそろと降りはじめると、気配を聞きつけて同居人たちが興味ぶかそうに降りてきた。

「どうなさったんですか」

「いいえ、なんでもないんですの。香子が急にお腹が痛いと言いだしましてね……盲腸らしいんですのよ」

安江が必死になって、取り繕っている声が聞えた。

この堀田家の秘密は、自分さえ黙っていればいいのだと、医師はそのときまで軽く考えていた。

終戦直後の大学病院の産婦人科の病棟は、ひどく暗かった。

村岡教授の頼みなので、同僚がいそいで急患のベッドをつくってくれた。

「父親がわからない妊娠だし、本人はまだ十八歳で、妊娠した覚えはないと言いつ張っていますから、ひとつ宜しく頼みます」

「わかりました。母体は健康ですし、心配はないですよ」

同僚は村岡の慌てぶりに、かえって不思議そうな顔をした。

そんなことには慣れているといった顔だった。

一時間ほどで、産室をあとにして、村岡は自分の研究室で安江と一緒に坐っていた。

「先生、ほんとに申し訳ありません。娘がこんな恥ずかしいことをして……」

「いや、今さら出来てしまったことを言っても仕方がありませんよ。あんまりお嬢さんを責めないほうがいいのではないですか」

村岡は、元気づけるように安江の背中に手を置いた。そのとき、安江がきゆうに堰を切ったように村岡の胸に顔を当てると、嗚咽を洩らしはじめたのだ。

村岡は、安江の髪の毛の匂いをかいだ。本当ならば、夫の堀田が、安江を慰めているはずだった。

「ぼくは、あなたと堀田の結婚式のときのことをまだ

覚えていますよ」

村岡は何の意味もなく、そんな言葉を口走った。自分の心の底に隠していた気持を伝えたかったのだ。

がらんとした研究室の裸電燈は、今にも消えそうに暗く、窓の外では強い風が吹きはじめていた。

そのとき、廊下を急ぎ足に踏む荒々しい足音が聞えたのだった。

村岡が出ると、産婦人科の同僚が緊張した顔で立っていた。

「ちょっと問題が起きました」

「子供が出ないのですか」

「いや、母子ともに安産だったのですが、生れてきた子供の……」

産婦人科の同僚は声をひそめた。

「どこかがおかしいのですか。奇形か何か……」

村岡は、先走りして尋ねた。

「いや、青い目をした、金髪の子供なんです」

「それでは、G I かなにかに……」

「わかりません。本人に聞いただしてみないと……もし、強姦されたりしたのならば、子供の養育先を早く見つけなければいけないし……」

「なるほど、では母親に伝えましょう」